総評２０２４年５月分　杉本真維子

「ポケットがたくさんほしい／しあわせは／歪なかたちに砕いていくこと」折原（神奈川県）
しあわせとは歪なもの、というこの世の真理のようなものを極めてシンプルに提示しているところに好感をもちました。

「生まれたての卵白逃げる／ぬらりらと／そんなに怖い思いをしたの」折原（神奈川県）
「ぬらりら」が面白いですね。「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」（中原中也）に匹敵するような、優れたオノマトペです。

「脱色の眉光らせて家を出る／私が夏のいいなづけ」鈴木たなか（京都府）
金色の眉と夏のまぶしさがとても高いレベルで合致している、と感じられました。

「昼寝覚ああそうだった母だった」檜野　美果子（宮城県）
こうして、思い出されるように、「母」と主体はつねにぴったりとくっついているわけではなく、距離のあるものなのでしょう。勿論、母に限らず、役割、名、性別など属性はすべてそうです。

「浜辺で貝を避けるみたいに踊る」長谷川柊香（宮城県）
「浜辺で貝を避ける」という無理難題が効いています。当然、よろけるようなちょっと不恰好な踊りとなるでしょうが、そもそも踊りとはそのようなものをいうのかもしれません。

「金魚は名前を付けると溶ける」長谷川柊香（宮城県）
金魚と視線の間にあるはずの水槽が言外にきちんと描かれていて、それゆえ〝溶ける金魚〟という字義に即したなまなましさがシャットアウトされています。ガラスに映るそれは水彩のような美しさとしてこちらに届けられます。

「ポッケ底／ビスケットのくずの感触／もしかしたらやさしさの骨」余剰な卵（福島県）
「やさしさ」まではめずらしくない発想ですが、「骨」まではなかなか出てこないのではないでしょうか。感触を大事にした結果だと思います。

「押入れに潜って冬を越してきた／夏服たちの長い息継ぎ」貴田　雄介（熊本県）
夏服たちのくらりとめまいがしそうな長い息継ぎ、その越冬が、リアルに伝わります。かすかな樟脳のにおいさえ漂ってきます。

「孤独とは自分に忘れられること／私を見つけ光る自販機」さほ（神奈川県）
モノから見つけられる「私」。人間のごうまんさがそぎ落とされた記述に、世界の真実へ近づこうとするかすかな熱意が感じられます。

「生きている／人の祈りが遠くって／雨に打たれる建設現場」杉本　太（北海道）
祈りというものの静謐さからもっとも遠いところにあるように思える「建設現場」。詩とは

たいてい、そのように、何かからもっとも遠いところにあるものなのかもしれません。

「風が吹く　思わず腕を広げ／ふと思い出してる鳥だった頃」青井しおり（東京都）
大変すなおな作品。ここを出発点として、作者は飛翔する、という予感がしました。

「かねめあて／言葉を呼んでみだりなり／大きな心でどかんとつぶやく」畔上透（東京都）
「かねめあて」。口に出してみると、たしかに、あっけらかんとした語感だと思いました。意味に反して、どこかに「大きな心」が隠れているようです。

「俺と同じように／四足歩行している犬と／眼があう／恋がはじまったら／どうしよう」鯖詰　缶太郎（宮城県）
「同じように」とわざわざいうのですから、この「俺」は犬ではなく、人間の可能性がありますね。そこが斬新です。自分でもコントロール不可能な身の上に、読んでいてこちらもドキッとして、ちょっとうろたえました。

「出会いたい人に／出会えぬ気がしてる／薄暮の中で干した洗濯」髙松　瞳（東京都）
薄暮の閉塞感が、不安のようなものを掻き立てています。どこか、が確実に指し示されていて、誰もが潜在的にもつ不安を突き当てるかのようです。

今回は、やはり日本語の流れとは縦であり、縦書きがふさわしいのだ、と思わされる作品に多く出合い、学ばせていただきました。次回も投稿をお待ちしています。